

『世界一周の誕生』を書き上げた園田英弘氏は、半年間をメルボルンで過ごした。その帰朝報告として、地球を東西に横断するのではなく、南北に縦断する体験の意味を考察する話題が提供された。世界一周航路の確立は19世紀後半の出来事だが、南半球に行ってみると、北回廊の太平洋横断航路のほか、南回り回廊の存在が見えてきた。それはカナディアン・パシフィック鉄道によって北米大陸をヴァンクーヴァーに至り、そこからハワイを經由し、シドニー、シンガポールに至る回廊であり、大英帝国の世界支配通路だった。同時期に発達した電信網も、一端戦争状態が勃発すれば保守管理が極度に困難な陸上よりも、むしろ海底ケーブルに利点がある。この観点からも、南回廊の戦略的意義は無視できない。

とともに帆船航海の末期においては、英国から南極を周回して、オーストラリアに到達する航路が確立され、航海日数が、それまでの200日から70日へと大幅に短縮された。西風皮流を利用したこの航路で便利なのが、南部のメルボルン。一方、東海岸のシドニーは、昨年人気を博したアニメ映画『二毛』で息子を捜す親魚が辿った道筋からも知ら

季差の視角
地球縦断の文明学提唱への前哨

れるとおり、赤道から高速で下ってくるオーストラリア海流の恩恵を受けている。メルボルンとシドニー。距離にして1000キロを隔てる、これら両都会の覇権争いは、ひょっとすると、航海に利用されたこの海流の違いによって説明できるのでは、というのが園田仮説。首都にキャンベラが選ばれたのは、いうまでもなく両者の中間地帯による均衡を意図してのことである。

世界一周に関しても、南半球の発想は異なる。東西に重きを置き、太平洋、大西洋の横断を念頭に置くのが北半球の発想だ。それとは違って、南半球からいかにして往復と異なった大陸を經由して欧州（とりわけロンドン）に到達するかを軸とする南北主義の発想が、南半球の旅行会社には、今日なお根強く残る。

これにコメントを加えたアレックス・ベネット氏はニュージーランド出身。母国は North Island、South Islandからなるが、西隣には Mouth Island とあだ名される、口うるさい国が控えている。欧州でのかつての Grand Tour の南半球版といえる The Great OE (Oversea Experience) が社会的な通過儀礼となっている故国では、世界の対蹠点に等しい宗主国イギリスは、水くさい社会と毛嫌ひされ、最近

では visa の取得が困難になったせいもあり、目的地も日本を含むアジアへの人気が高まった。英会話教室ノヴァの先生には、実はニュージーランド人が多くて、米語でなく「正しい」英語を教えているのは、まことに慶賀すべきことだ。その反面、ニュージーランド人には POM すなわち Prisoner of Mother (Eng) land という劣等コンプレックスが根強く、北方行は up、南行は down と表記される価値観に反発して、南を上にした地図を掲げる運動は、オーストラリア共々、南半球では社会的に広がっている。だが、単純に上下を逆さまにただけでは、一方の優位を主張したい価値観そのものは止揚されまい。

表題の「季差」の発案者、テモテ・カーン氏からは、これを seasonallag と訳すのには抵抗もあるが、lag といわれて、南が遅れていると解釈する必然はない、とのご意見。園田氏からは東西軸ではなく南北軸を左右にとった世界地図が提唱された。オーストラリアのヒュー・クラーク先生からは、「Go West」には田舎に行くというニュアンスのあることも確認され、世界の西北の果てに位置づけられる大英帝国の首都への、潜在的かつ両義的な感覚の可能性も示唆された。地球縦断

の文明学を確立するためには、地勢的条件に左右される人々の心理学も必要とは、全体を総括しての浜口恵俊名誉教授のご指摘。日本語のタテヨコが英語の horizontal/vertical とは異質の分類枠であることも、園田氏が確認した。

南半球と北半球で一方の休暇を利用して他方へと季節移動を繰り返すと、冬ばかりの生活をしたり、夏ばかりの数年を送ったりすることにもなる。時差とは又異なったこの地球体験を、ひとつの文明学へと練り上げるのは、将来の課題だろうか。想えば第1次南極越冬隊長を務めた西堀栄三郎は、その晩年、縦軸の世界一周を主張したい価値観そのものに気づいて、日本隊によるその一番乗りを計画した。オーストラリアもまた、日本との通商関係の拡大を視野に入れ、経度を共有する隣人というコピーを流した経緯もある。日本や中国における南天群星へのあこがれも、今日（なお！）その名で人気を博しているヴォーカル・グループに至るまで、その情緒の連綿を辿る文化的系譜を探ってみる余地がありそうだ。

*国際日本文化研究センター・第114回木曜セミナーに取材した。司会者として文責は稲賀にある。

稲賀繁美
国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教役